『のび太の宇宙小戦争』と『のび太の宇宙小戦争 2021』 の比較を通じて

文学部 3 回生 村越知晟

はじめに

私は、正直『のび太の宇宙小戦争』（以下、旧作と書く。）があまり好きではなかった。今になって思うと、初めて旧作を読んだのが小学生の時であり、他の作品と比べて旧作がシリアスで暗い雰囲気を醸し出していたため受け入れがたかったからかもしれないとおもった。今回、『のび太の宇宙小戦争 2021』（以下、新作と書く。）を映画館で見て、こうした暗い雰囲気が払拭されたためか受け入れやすかった。そのため、最初に新作を見たとき、すごく良いリメイクだったと思った。ただ、この文章を書くに当たって旧作と新作を改めてみたところ、最初の印象ほど良くはないのではないかと思うようになってしまった。その理由を探るため、旧作と新作を比較してどういう点が変わったのかについて取り上げたいと思う。つまり、この文章を書く動機は完全な自己満足であるため、読者各々と解釈が異なる点があるかもしれない。また、ここから先の文章は新作についてのネタバレを含むこともご了承願いたい。

大きな違いその 1. ひみつ道具の効く時間に制限がある描写のカット

旧作と新作の大きな違いとしてまず、パピとの出会いまでの経緯が異なることが挙げられる。新作では、のび太はスネ夫たちの映画制作に協力しており、パピのロケットもスネ夫の家の庭で見つける。一方、旧作ではのび太はスネ夫の映画制作から追い出され、それに対抗するべく静香と裏山で自分たちも映画を撮ろうとする。しかし、映画撮影の最中、ロボッターをつけておいた静香のぬいぐるみがいなくなってしまう。結局、ぬいぐるみを裏山で見つけることはできず、家に帰ったところなぜかのび太の家の庭にぬいぐるみが発見される。パピのロケットは裏山で発見している。このシーンでは、のび太とドラえもんが家に帰りがてら、「ロボッターは電池で動いているんだ。その電池はそう長くもたない。」と言っている。

同様のシーンとして、のび太たちがピリカ星の自由同盟の地下基地に行くときのシーンが挙げられる。新作では、かたづけラッカーの効き目が切れ、急いで地下のアジトへと向かっている。一方、旧作では、かたづけラッカーの効き目がきれ急いで近くの公園に避難した。その時のび太は、かたづけラッカーの効き目がきれたことをドラえもんに詰め寄り、それに対してドラえもんは「ききめが永久に続く薬なんてあるか!! なんにだって有効期限はあるんだ!!」と返している。

これら 2 つのシーンに共通していることは、ひみつ道具の効き目には時間的制約があることがドラえもんの口から語られることである。すなわち、これらのシーンは最後にスモールライトの効き目がきれることの伏線になっていると捉えることができる。新作では、こうしたシーンがまるまる削られてしまったため、最後にスモールライトの効き目が切れるという展開があまりにも唐突に感じてしまうおそれがあると思った。ちなみに旧作によるとかたづけラッカーの効き目は 4 時間らしいが、ピリカ星についてから自由同盟に向かうまで 4 時間もかかったのだろうか。

大きな違いその 2. 登場人物の描写

2 つ目の大きな違いとして、パピが静香と引き換えに捕まらないことが挙げられる。旧作では、パピは PCIA に捕まった静香と引き換えにドラコルルに捕まり、処刑の時に助けられるまで捕まったままである。一方、新作ではパピが捕まろうとしたとき、ドラえもんたちが助けに来て、静香とパピは捕まらずに済む。その分、新作は旧作よりもパピとのび太たちの絡みが増えた形になっている。その結果、パピについての印象が旧作と新作では大きく違ったものになったと考えられる。旧作のパピは、のび太たちと同世代とは思えないほど毅然としている。一方で、新作のパピはスネ夫に対して自分も恐怖感を感じていると言ったり、最後のシーンでピイナの言葉に泣いて反応したりと 10 歳という年齢相応の弱さも見えるような描写になっている。この弱さは、視聴者にとっては親しみやすさも感じさせるためよい面であると言えるが、大統領という立場にいる人としてはどうなのだろうかと思ってしまった。

パピのみならずドラコルルやギルモアについても旧作に比べてシーンが追加されている。特に、ドラコルルは最後にジャイアンによって戦闘艦が撃墜され捕まったときに自分が捕まる代わりに部下の安全を約束してほしいと部下思いの描写が追加されている。このように新作では、ゲストキャラクターの新しい側面が追加されており、旧作との雰囲気の違いを感じさせる要素の 1 つとなっている。

この戦争に対するとらえ方について

ここまで、旧作と新作の違いを見てきた。細かい違いは他にもあるが、ここではのび太たちがこの戦争をどのようにとらえていたのかについて考察したいと思う。

旧作では、前述の通りパピは静香の代わりに捕まってしまったため、ロコロコと一緒にパピを救うためピリカ星に向かうことになる。一方、新作では戴冠式を前にパピが一人でギルモアのもとに行き、捕まることになった。このパピの行動については、いろいろ思う人がいたのではないかと思った。大統領という立場の人間が敵に捕まりに行くことは、降伏に等しい行為であり、今後ギルモアの圧政が続くことが確定してしまう。すなわち、ピリカ星の民の自由が奪われるという最悪な未来が待っているのである。それでもなお、この決断をしなければいけなかったパピには様々な葛藤があったはずだが、そうした描写が薄いことでパピは蜂起前日になぜか勝手に捕まりに行った人のように思われてしまっても仕方がないのかなと思った。パピが捕まり、のび太たちはピリカ星に行く部隊と基地に残る部隊の二手に分かれて行動することになる。この後の展開では、旧作ではのび太たちは自由同盟の地下のアジトで自由同盟の人もろとも捕まってしまうが、新作ではのび太たちだけは自由同盟の人によって逃がされ、そこから話が展開している。

また、基地に残った静香とスネ夫のシーンやセリフにもいくつか違いが見られる。例えば、無人戦闘機が基地に襲ってきたときスネ夫は怖さのあまり倉庫にとじこもってしまう。その時、スネ夫の靴が片方脱げ、それを見つけた静香がスネ夫を見つける。スネ夫が怖がって攻撃に参加できないと感じた静香は、旧作では脱げた靴をそのまま放置し自分ひとりだけでも攻撃に参加しようとする。この時、静香は「このまま独裁者に負けちゃうなんて、みじめじゃない。」と言っている。このシーンからは、基地に無人機が迫っている緊迫した状況であることや静香がこの戦争を独裁者ギルモアとの戦争だと捉えていることがうかがえる。一方、新作では静香はスネ夫の脱げた靴をきちんとした状態でスネ夫の前においている。このシーンは、私にはまるで静香がスネ夫のことを待っているような描写に見えた。したがって、旧作のような緊迫感は薄れているのかもしれない。また、前述の静香のセリフは新作では、「独裁者」の三文字が削られている。よって、静香はこの戦争を

独裁者との戦争と捉えるよりは、パピやのび太たちを苦しめている敵との戦争と捉えているのかもしれないと思った。このことを示唆するシーンとして他には、静香とスネ夫がピリカ星にいくシーンが挙げられる。旧作では、ピリカ星にいる自由同盟軍の部隊から連絡がないことから安否を確かめにピリカ星に行くことになる、新作では、無人戦闘機を撃墜した勢いでピリカ星に向かっている。その決断を制止する隊員に対し、静香は「のび太さんたちが地上で頑張っているんです。」、スネ夫は「友達を助けなきゃ」と言っている。このことからも静香とスネ夫の「仲間」のための戦争であるという考えが強く表現されているといえる。したがって、旧作でも新作でもパピを助けるための戦争であるということは共通しているが、新作では仲間のために戦っているという描写が旧作よりも色濃く表現されていると言えるだろう。

最後に

ここまで、旧作と新作の違いについてみてきた。全体としては、伏線となるようなシーンを削ってピイナという新たな人物を追加し、パピの人物像を旧作よりも掘り下げていることやドラえもんたちの仲間意識を強く表現していることが旧作と新作の違いであるといえるだろう。それを是と捉えるか非と捉えるかは正直、人によると思った。さすがにのび太たちに人殺しをさせないように配慮はしていたが、戦争は他人の命と引き換えに自らの命も失うものであり、この作品のようにはいかないのが現実であるといえる。また、旧作のピリカ星はところどころ荒廃しており、PCIA の残虐さのようなものが垣間見えたが、新作で人々はテレビの前に座っていたり、ハンバーガーを食べていたりと普通の生活を送っているように見え、PCIA の残虐さというものも薄れているように感じる。また、スネ夫が「自由を我らに、なんちゃって」と言っていることからも、「自由を我らに」という自由同盟軍のスローガンがスネ夫の中では形骸化し、この戦争は仲間を脅かす敵を倒すということに主眼が置かれているとみるのは若干考えすぎかもしれない。最後にここまで新作を批判するような口調で書いていたように思われるかもしれないが、私自身は新作がそれほどひどいとは思わなかった。旧作の雰囲気をより取っつきやすくなるように変えたことは、間違ってはいないと思っている。いずれにせよ、新作しか見ていないという人は是非旧作も見ていろいろと考えてほしいと思った。

最後に、のび太やスネ夫を君づけしないようにしたためしずかちゃんのことを静香と表記したが、違和感しか覚えなかったので、しっくりくる書き方を考えたいと思った。